都弱視研

東京都弱視教育研究会
世田谷区桜丘５－19－１
発行人　後藤真司
印刷　依田印刷㈱
第52巻　１号発行　R4.7.1

令和４年度の東京都弱視教育研究会の活動

東京都弱視教育研究会 会　長
世田谷区立笹原小学校 校　長　**後　藤　真　司**

東京都弱視教育研究会（以下「都弱視研」）は、都立盲学校４校（文京、葛飾、八王子、久我山青光学園）、筑波大学附属視覚特別支援学校、そして区市町村立小・中学校の弱視通級指導学級11校（小学校９校、中学校２校）の相互の連携を図るとともに、広く弱視教育の研究と普及を推進することを目的として会を運営しています。

新型コロナウイルス感染症の感染状況の改善への兆しが見える中、３年ぶりに集合型での研究総会をオンラインも活用して４月22日に開催し、今年度の研究活動がスタートしました。事業計画では、年間11回の研究全体会（授業研究、公開授業、講演会を含む）を計画しました。先行きの見通せない状況も続いていることと、この２年間、試行錯誤しながらもオンラインを活用した運営方法も取り入れ有効性を確認できたことから、集合形式及びオンライン活用での研究会開催など、弾力的に研究活動を展開していきたいと考えています。

研究総会に続いて、記念講演を開催し、筑波大学 人間系（障害科学域）准教授 小林秀之先生に「弱視教育の中で育てたい力」という演題でお話をしていただきました。弱視教育には視覚補助具やＩＣＴ機器の活用、触覚教材・拡大教材及び音声教材等各種の教材の活用を通して、情報を収集・整理し、主体的な学習ができるようにすることが求められると同時に、障害があるために、自分にはどうしてもできないことについては謙虚に人に援助を依頼し、できることは精一杯努力する人間になることが大切であると、対人関係やコミュニケーションの重要性についても教えていただきました。

今年度、都弱視研では、研究主題を「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」、副主題を「発達段階に応じた援助依頼を目指した指導の在り方」としました。子どもの自己理解や障害受容の指導とともに、将来に向けて自己実現を図るため発達段階に応じた援助依頼を目指す際の支援などについて、全体での研究会とブロック別での研究会を開催し、会員相互の連携・協働を図り、より実践的な研究につなげていきたいと考えています。

また、今回の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。さらにＧＩＧＡスクール構想に基づく一人１台のタブレット型情報端末の活用も進んでいます。この利活用が個別最適な学習を実現する手段としても重要となります。本研究会での研究推進と会員相互の連携・情報共有の充実が、より一層求められます。

児童・生徒の個々の状況や課題を見失わず、これからの社会を生き抜く力を身に付けさせることを目標に研究を積み重ねてまいりますので、関係諸機関の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

令和４年度　研究総会　記念講演（４月22日）

「弱視教育の中で育てたい力」

講師　国立大学法人 筑波大学 人間系 障害科学域 准教授　**小林　秀之** 先生

＜はじめに＞

「視力0.06の世界　見えにくさのある眼で見るということ」(小林一弘, 2003)の最後に、次の文章が記載されています。

> 障害のある人たちには、障害にあまえず背伸びせず、自分にはどうしてもできないことについては謙虚に人に援助を依頼し、自分にできることは精一杯努力するといった生き方のできる人間になってほしいと思いますし、障害児の教育に携わる先生方には、子どもたちをそうした生き方のできる人間に育てていってほしいと心から願っています。

このような方向性を核にして育てると、社会の中で活躍できる大人になってくれるのではないかと期待しています。

＜精一杯努力する力＞

大学で講義室にパソコンあるいはタブレットを持ち込んでいる学生は多くいます。弱視の学生は、資料を見る時にはタブレットを使うけれども、何か入力する時にはパソコンを使うし、大量の文章処理をしなくてはならない場合には音声ソフトを併せて使っている弱視学生もいます。今の段階では、情報機器の一つとしてパソコンを活用できるようにすることが、大切だと考えています。また、主体的な学習を支える道具、あるいは手段として情報機器があるという点を大切にしてほしいです。

それは、視覚補助具も同じです。何のために指導しているのかといえば、それは子どもの主体的な学習や生活を支えるためです。このことを前提とすれば、子どもに「疲れてない？大丈夫？」という言葉かけより、「頑張ったね。よく見たね。もう一回挑戦してみる？」といった言葉かけが望ましいでしょう。また、思春期になると使うことをためらいがちになるからこそ、小さい頃から、手放せない道具として使わせることが大切です。

大学生になってから視覚補助具が必要だと思う学生もいます。単眼鏡を使ってスライドを見たり、一人暮らしを始めるとルーペを使って冷凍食品の調理の仕方のような小さい字を見たりします。だから、必要があれば使うようになるということも感じています。それでもやはり、小学生の時から丁寧に一つずつ使えるように指導していくことはこれまで同様に継続していってほしいと願っています。

広島市立本川小学校弱視通級指導教室で指導していた樋口正美先生は、「考える力」をつけるために、「どうしたらいいと思う？どう考える？」と低学年の子どもにも投げかけていました。ヒントを与えながら自分の口でどうしたらいいのかということを必ず言わせていました。それから、「伝える力」をつけるために保護者や担任の先生と密に連絡を取りながら、「先生が代わりに言ってあげるんじゃないんだよ。あなたが担任の先生とかお友達に説明できることが大切なんだ

よ」と、子どもに伝えていました。樋口先生の実践から、目指す子ども像あるいは学級目標を常に意識することが大切だということも実感しています。

本川小学校「目の教室」目指す子ども像
・自分なりの学習方法を獲得しようとする子ども
・自分でできることは最大限に努力する気持ちをもつ子ども
・自分のできないこと、わからないことを人に伝えたり、説明したりすることができ、適切な援助を求めることができる子ども
樋口正美・小林秀之（2011）

＜謙虚に人に援助を依頼する力＞

援助依頼は合理的配慮を求めるということと共通点があると感じています。合理的配慮は、本人が要望を出さなければ実施されません。また、大学での合理的配慮は楽に学ぶための対応だと期待する人がいますがそうではありません。

大学の先生から、弱視の学生への合理的配慮について質問されることが多くあります。たとえば、A4用紙に1スライドで作成した資料を弱視の学生に配布しているが、その学生が目を近づけてスマホのとても小さい字を見る姿を見て、A4用紙に1スライドの資料が本当に必要であるのかと問われたことがあります。「本人に聞いてください」と答えますが、こんなことから、子どもたちには、自分にとって何が必要で、何を自分でできるのかをしっかりと理解させることが大切だと改めて感じています。また、同様に不必要な支援には「それは不要です」と言える力も大切だと思います。

上手なコミュニケーションがとれる力も、とても大切です。弱視の学生に、盲の学生の場合と同じように周りの学生が声をかけるかというと、そうでもありません。なぜなら、普段弱視の学生は見えているので、周りの学生から弱視という状態像がだんだん薄れてくるためです。そうなると、弱視の学生は自分から同級生とコミュニケーションをとりにいかなくてはなりません。キャンパスの中を歩いているときに、すれ違う人の中から同級生を探すことは、弱視の視機能では至難の業です。引っ込み思案だったり一歩引いてしまったりする弱視の学生は、孤立しやすいように感じています。

ですから、例えば入学直後の自己紹介のときに、大勢の中から知り合いを探すことは難しいとか、すれ違っても視力の関係で気が付かないことがあるので声をかけてくださいとか、自分から周囲に伝えるだけで全然違います。そのために、小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに、自分なりの言葉で障害について説明する力を身に付けていくことがとても大切だと考えています。

（記録　住吉小学校　長）

【令和４年度　東京都弱視教育研究会　役員一覧】

役　　職	氏　　名	所　属　校
会　　長	後 藤 真 司	世田谷区立笹原小学校　　（長）
副 会 長	水 野 博 子	東京都立葛飾盲学校　　（長）
副 会 長	望 月 伸 悟	町田市立本町田東小学校　（長）
監　　査	永 浜 幹 朗	江戸川区立第四葛西小学校（長）
監　　査	山 岸　　健	江戸川区立松江第一中学校（長）
事務局長	北 川 由 美	世田谷区立笹原小学校
会　　計	近 藤 修 安	町田市立本町田東小学校

【 令和４年度　東京都弱視教育研究会　事業計画】

月	項　　目（会　場）
4	第１回研究全体会　総会議案検討・都要望区市町村要望検討・ブロック別分科会別研究会 研究総会　記念講演　講師：筑波大学 人間系 障害科学域　小林 秀之 准教授
5	第２回研究全体会　資料提供(世田谷区立笹原小学校）・専門性向上研修・分科会別研究会
6	第３回研究全体会　ブロック別研究会(小中)・分科会別研究会
7	第４回研究全体会　研究授業（江戸川区立松江第一中学校） 講師：愛知教育大学　相羽 大輔 准教授・第１回校長会　　＊都教委との意見交換会 第５回研究全体会　見学会（慶應義塾大学 障害学習支援室）　講師：中野 泰志 教授
8	＊通級指導学級三者連合協議会（都難言協・都情研・都弱視研） ＊視覚障害教育夏季専門研修　８／４～８／５　（オンライン）
9	第６回研究全体会　研究授業（大田区立東調布第三小学校） 講師：愛知教育大学　相羽 大輔 准教授　・全国大会準備
10	第７回研究全体会　資料提供(新島村立新島小学校）・専門性向上研修・全国大会資料提案
11	第８回研究全体会　ブロック別研究会(東西)・全国大会資料検討・第２回校長会
12	第９回研究全体会　講演会 講師：株式会社 育視舎 視覚発達支援センター　梁田 明教 所長　＊うえのZooスクール
1	第10回研究全体会　公開授業（筑波大学附属視覚特別支援学校） 第63回弱視教育研究全国大会（栃木大会）にて 研究発表
2	第11回研究全体会　年度末反省・新年度事業計画
3	第12回研究全体会　年度末反省・次年度研究テーマ・次年度組織

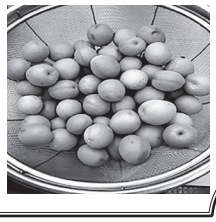
アンテナ　No.75

練馬区立中村西小学校

本校の弱視通級指導学級は、昭和50年４月に開設され同年９月に開級しました。

弱視教室には、調光設備が整っていたり、拡大読書器や大型テレビが導入されていたり、弱視児童が学習するにあたって安心できる環境づくりがされています。

練馬区と中野区の境にある本校は、校庭がとても広く自然が豊かです。その豊かさを活用し、季節の植物を観察したり、様々な種類の木になった実を収穫したり、生き物を見つけて飼育する等の生活体験を積極的に取り入れて学習しています。



また、年に３回一斉学習会を行い、通級している児童が一堂に会する日を設け、縦割り活動やウォークラリーを行います。

また、同時に保護者交流会も行っています。　　（尾﨑　公江）